

初級レベルから始める俳句学習

—対話重視の教育実践—

嶋田和子(アクラス日本語教育研究所)
落合知春・森節子(イーストウエスト日本語学校)

1. はじめに

近年学習者の創造性と協働性を重視した日本語教育の重要性が言われているが、教育現場を見ると従来通りの「文型積み上げ式授業」がなされていることが多い。特に、語彙・文法など言語的知識が十分ではない初級レベルにおいてはその傾向が強い。学習者自身の創造性を活かし、仲間との協働性を重視した授業実践は、学習者のやる気を引き出し、学習効果を上げることにつながることを考えると、実践の見直しが課題であると言える。

A校では、「自分のこと・自分の考えを伝える力」を重視し、特に「対話」に重きを置き、人とつながる力を養うことをめざして日本語教育を実施してきた。その中の1つに各クラスでの俳句づくりおよび校内俳句コンテストがあり、20年以上にわたり実施し続けている。初級学習者から上級学習者まで全クラスで俳句づくりが行われ、クラス代表句をもとに校内俳句コンテストが行われるのである。本発表では主に初級クラスにおける実践例を紹介し、日本語学習に対していかなる効果があるかについて考察し、俳句学習の意義について検証する。

2. 対話重視の日本語教育

多田(2006:45)は、「多様な他者と英知を出し合って語り合うことにより、新たな知見や結論などを創生させる」ものとして「共創型対話」を提唱する。現場では初級クラスにおいて「共創型対話」は忘れられがちであり、また会話と対話の違いが意識されることも十分ではない。平田(2012:31)は、会話は「価値観や生活習慣なども近い、親しい人同士のおしゃべり」、対話は「あまり親しくない人同士の価値や情報の交換、あるいは親しい人同士でも価値観が異なるときに起こる価値のすり合わせなど」であると定義している。さまざまな国・地域から集まった学習者が学ぶ日本語教育機関は、多様な対話が生まれる場であり、そのことを初級スタート時点から意識して実践を行うことが重要である。「言語的知識が乏しい段階で、対話は難しい」というのは、教師の思い込みである。また、「初級クラスで俳句学習など無理」というのも同様に教師側の思い込みである。ある面では個人作業であり、一方では対話を通じた豊かな協働作業でもある俳句学習を通じた初級学習者の学びについて考えることとする。

3. 初級クラスにおける俳句学習の意義

どのレベルにおいても俳句学習の意義は大きいと言えるが、本発表では特に初級クラスに焦点を当てて、述べることにする。以下、5つの点を取り上げる。

1) 拍感覚が身につく、日本語のリズムの理解につながる

初級スタート時点から拍を意識した指導が行われているが、俳句づくりで5.7.5というリズムを意識することで、さらに日本語のリズムへの理解が深まる。例えば、「JRりょこう うみ

をみました きれいです」という俳句を取り上げてみる。作者は「JRりょこう」は「J」「R」それぞれ1拍であり、全体では5拍だと考えていた。しかし、「JR」は日本語では5拍だとわかり、日本語の拍を再認識することができた。

2) 日本語で自分の思いを表現することの面白さを知る

限られた言語的知識であっても、リズムに乗せ自分の気持ちを表現することで、学びがより楽しいものになる。また、俳句づくりを通して表現する楽しさを知ることで、さらに毎日の日本語授業に興味を湧いてくる。それは、「俳句作りはおもしろかったです。俳句は作ったことがありませんから、むずかしいと思いました。でも、作る時、いっぱいことばを考えました。どれを使うか考えました。だからよかったです。そのとき、楽しかったです。もっとがんばりたいです」という学習者の感想シートからも分かる。

3) 周りの物に対する観察眼が育つ

留学生も生活者であり、日常生活でさまざまな日本語に触れているが、日本の四季の移り変わりに目を向けることで、さらに日本語学習が楽しいものになる。俳句づくりでは周りの物に目を向け、さまざまな音に耳を澄ますという行動が自然に起こり、それが言葉の学びにつながっていく。「先生、山が赤いですね。山が燃えます」と、校外学習で訪れた山に感動した心が、季語を入れながらの俳句づくりへとつながっていく。

4) 俳句づくり・クラス句会を通して、仲間との対話の楽しさを知る

クラスメイトがつくった俳句を見てお互いに対話することで、自分とは異なるものの見方や感じ方があることを知る。また、自分と同じような経験や想いに共感する。こうした仲間との触れ合い・対話は、教室の中のコミュニティづくりに大いに寄与することになる。俳句づくりにおける対話の広がり・深まりに関しては後述する。

5) 選句を通して地域社会とのつながりが強くなる

選者は地域に暮らす人々、つまり、学校近くの商店、公民館、町内会、ボランティアサークルなどである。「今年の選句用紙はまだですか」と心待ちにしてくれている店主、「こぼれたよ 秋のパレット 木の上に」という俳句に対して「どの句も一生けん命作った様子がわかります。秋=さみしい=家族を想う気持ちは国を超えて共通なのですね。情景があざやかに目に浮かんでくるので、これを選びました」といったコメントとともに近くのコンビニ従業員から選句用紙が戻ってくる。このように地域とのつながりがより強くなる。

4. 初級クラスにおける俳句授業の実践例

俳句学習の意義を5点に絞って述べた。次に、実際にどのような流れで授業が行われているのかについて対話という視点から述べる。先に述べたように、クラスによっても、レベルによっても授業展開はさまざまだが、ここではB教師が2015年11月に担当したCクラス(ゼロスタート5か月目の初級後半クラス)の事例を挙げる。

1) 俳句とは何かを簡単に説明する。

まだ初級段階なので、詳しいことは話さず、①世界で一番短い詩であること、②5.7.5であること、③季節の言葉を入れるなど基本的なことにだけ触れる。できるだけ自分自身で考え、仲間と話し合う形を取ることを心がける。例としてB教師は、まず「アルバイトやっとならって うれしいな」という句を提示し、「気持ちのことは＝うれしい」を「季節のことは」に変えるというタスクをした。このレベルでは何もないところからは難しいので、『さくら見る・海へ行く・虫のこえ・雪の道』の4つの言葉を示し、「どれが一番自分の気持ちに合っているか」と問いかける形をとった。学習者の一人が「アルバイト終わって、一人で道を歩いています。その道は静かな道で公園があります。そこで虫が鳴きます。とても気持ちがいいです」と言うと、他の人たちも自分自身の思いを言い始めた。

2) 5.7.5で季語を入れて実際に俳句をつくる

いくつかの季語を紹介し、それがイメージ化できるように多くの写真を提示する。また、校外学習のときの写真をスライドショーで流し続ける。すぐに作成は難しいのでシートを配布し、ともに考えるところから始める。例えば、「秋になり 山が変身 楽しくて」という学習者D（ベトナム・男性）の句がある。この句が生まれるまでの教師Bとの対話の一部を紹介することとする。

D：「紅葉」を入れたいけど、「秋になり」を使ったから……。

B： そうね。「紅葉」と「秋」とどっちかにしましょう。赤い山のことが言いたい？

D： 違います。えっと、緑の山から赤い山になります。

B： じゃあ、「変身」ですね。

D： えっ、「変身」って何ですか？

B：（変身のジェスチャーとともに）変わります。

D： ああ、それぞれ。それぞれです。

3) 全員の俳句ができると、句会を行う

対話という視点で、学習者同士のやりとりを見てみることにする。選句した人が「なぜこの句を選んだか」を述べ、選ばれた句の作者が「なぜ、どんな気持ちでこの句をつくったのか」を述べ合う時間である。※E, F, Gは学習者（F＝「もみぢ散る かれしのいない 散歩道」の作者）

E： 恋人がいなくてさびしいですね。ちょっとかわいそうです。

F： そうです。恋人がいなくて、寂しい気持ちです。日本の秋は寂しいと聞きましたから。

E： あれ？ Fさん、恋人がいませんか。

G： Fさんは恋人がいますから、嘘です。

F： 俳句ですから、いいです。もし恋人がいなかったらさびしいですから、作りました。

G： ええ？ Fさんの恋人、かわいそうです。

4) クラス代表句を決める

クラス代表句を選ぶにあたって、学習者間の対話を重視する。十分に話し合った上で1句

選ぶことになるが、ここで教師は「単なる1票を持つ人」でしかない。日本語教師がすばらしいと思った句が選ばれることは決して多くはない。留学生の体験・想い・感じ方と、教師との感覚はどこか異なると言う。例えば、Cクラスでは「秋休み 焼肉食べたい 友達と」という学習者H（ベトナム・女性）がつくった句がクラス代表句になった。俳句としての完成度という点はともかく、非常に共感を呼んだ句であった。来日して半年も経たない留学生達にとって、クラス仲間との食事会や焼肉パーティは格別のものであることが、その時の対話からも感じられた。

5) 自分の句を短冊に書く

ノートなど書くだけでなく、短冊に記すことでさらに彼らの学習意欲は高まる。中には、「チンさんは中国人だから漢字得意ですね。私の句も短冊に書いてください」と頼み込む学習者もいれば、「うわあ、短冊に書くと、すごい人の俳句みたいだ！」という自画自賛する人、クラスメイトの句についてアレコレ質問を続ける人……こうして対話三昧の時間が生まれるのである。

5. 初級クラスで俳句授業を実践した教師の振り返り

俳句授業だけではなく、実践において教師には「深い対話」が求められる。多田(2011:55)は、「深い対話とは、知的爆発、知的化学反応が起こり、そこから新たな知恵や価値が共創されていく」と述べているが、「深い対話」は言語的知識が乏しいから無理だと決めつけるのではなく、初級段階から心がけることが重要である。上述したように、俳句授業はこうしたことをさらに推し進めてくれると言える。Cクラスを担当した教師達の振り返りから、変容に関して以下の5点を挙げることにする。

- 1) 作文が苦手な学習者も、俳句を通して「日本語で表現する楽しさ」を知り、達成感を味わうことができた。そのことで、作文への取り組み方が変わった。
- 2) クラスの学習者間のつながりがさらに強くなり、クラスのまとまりがよくなった。
- 3) 俳句学習を通して、学習者と教師の間の対話が深まった。
- 4) クラスを担当する教師の間での対話が深まった。
- 5) 「日本語サロン」「日本人との交流会」などで日本人との対話が深まった。

※日本語サロン＝学内で毎週ボランティアによって実施されているおしゃべり会

また、他の初級クラスで実施した教師は振り返りの中で、以下のように自らの実践について内省をしている。

- 1) どうやって学習者の想像力を引き出すかは、「教師の仕掛け」次第であることを痛感しそれは毎日の授業も同様であり、学習者の視点に立って授業を進めることの大切さを改めて知った。
- 2) 教師や学習者同士の対話で、俳句がどんどん生まれ変わっていくことのすばらしさを知った。授業でももっと対話を大切にしたいと思った。
- 3) 長い説明をするのではなく、簡潔に、分かりやすく伝えることの大切さを感じた。
- 4) 最初は初級クラスでの実施は無理だと思っていたが、教師のやり方次第だとわかった。

た。最後にそれぞれの短冊に自分の句を書いて、見せ合っている姿は感動的だった。
5) 自分自身が「俳句は難しい」と思っていたので、授業で行うことに緊張したが、学習者の楽しそうな様子に助けられ、「俳句は難しいもの」という思いが変わった。

6. 校内俳句コンテストにおける対話

ここまで初級クラスにおける俳句授業について述べてきた。2015年度校内俳句コンテストの1席～3席について紹介し、対話を軸に述べることにする。

- 1席：菖空 舞う景とともに 池飾り (中国・男性、中級)
2席：こばれたよ 秋のパレット 木の上に (韓国・女性、上級)
3席：もみじみる 家族会いたい 日が暮れる (ベトナム・女性、中級)

1席になったのは、母国で日本語を勉強し、中級クラスに編入した来日2か月の学習者Iである。Iは、俳句づくりの前の日に学校から行ったバス旅行が非常に心に残ったという。筆者との長い対話の中から一部記すことにする。

<どのようにしてこの句が生まれたのかという問いに対して>

山に登ったり、池を見たり、美しい色を見たりしました。その時は、遅くまで遊んだから赤い夕陽の光は、池に映って、そして赤いもみじも風といっしょに飛んだり、池の水面に浮かんで、とてもきれいでした。だから、すぐにこれを思い出してつくりました。

<どんな風景だったのか知りたいので写真を見せてほしいという依頼に対して>

携帯が切れてしまって撮れませんでした。クラスの友だちみんなに聞いたけど、みんな朝から夢中になって写真を撮ったから携帯が切れて、誰も撮れませんでした。本当に、本当に残念です。みんな残念です。

<俳句づくりは楽しかったかという問いに対して>

とても面白いと思います。そして、「五七五」は日本語の勉強に役立つと思います。みんな景色を思い出したり、文を作ったりして、すてきな俳句ができました。クラスの句はみんなどれもすごいと思います。これからも友達といっしょにいろいろな所に行って、いろいろな俳句を作りたいです。

2015年度の校内俳句コンテストでは、初級学習者の句は選ばれなかったが、以前「おどらせる おとがよんでる なつまつり」と平仮名だけで書かれた初級クラスのJ(ウクライナ・女性)の句が3席に選ばれたことがあった。素直に花火大会に行った時の想いを詠んだのだと言う。むしろ少ない日本語を使って表現したからこそこうした句が生まれたのではないだろうか。また、以前「青空に手を広げて 秋を取る」という句で特別賞をもらった学習者K(韓国・男性)は「私は理系なので、国でもあまり国語の勉強は好きではなかったのですが、俳句はルールがあって、短い言葉で書けるから、ルールがない作文よりおもしろかったです」というコメントを述べている。思い込みを捨て、アチコチの日本語の教室で対話をしながら俳句授業を楽しむことが望まれる。

ここで、2年在籍した5年前の卒業生L(韓国・女性)の初級クラスと上級クラスの時の俳

句授業の感想を伝えることとする。1年目(初級)と2年目(上級)の俳句づくりに関する思いを述べている。なお、結婚したLの家には今もなお、2年目の俳句「螢火よ 儂い光 消えないで」が記された短冊が大切に飾られている。

1年目は簡単でした。授業のときすぐに2、3句できました。まだ知っている単語も少ないし、「日本語よちよち歩き」の感じでしたから……。そんな私でも俳句が作れるんだ、と思うと嬉しかったです。5.7.5に合わせて作っていくのは、本当に嬉しかったです。テレビで聞いた言葉を入れたりしましたよ。

実は、2年目になった時は、とても難しかったです。なかなかできない。それは言葉も増えたとし、いろんな日本語を知っているから「どれを使おうか。どうしたらもっとうまく表現できるかな。これもいいな、あれもいいな、って考えちゃって、なかなかできませんでした。1年目は少ない言葉だから選びやすい。2年目は「ぜいたくになった」って感じました。

すなわち、かならずしも初級だから難しいというわけではなく、それぞれのレベルで俳句づくりを楽しむことができるということである。「初級学習者は、ただ表現する日本語の言葉が足りないだけで、表現したいものを中にたくさん持っているのだ」ということを忘れず、「伝え合う・響き合う」日本語学習を実践することが重要であると言える。

7. まとめと今後の課題

初級レベルの授業実践を中心に論を進め、レベルに合わせて俳句学習が楽しめ、また日本語学習に効果があることについて述べた。イメージしたものを日本語で表現するという作業、俳句づくりを通して対話が生まれ、日本語学習への関心が高まる。しかし、そこには教師の仕掛け力、臨機応変に対応する力、対話する力などさまざまな力が求められる。どのレベルであっても、学習者のやる気を引き出すような俳句授業ができるかどうかは、教師の力にかかっていると言える。それは、学習者の創造性と協働性を重視し、教え込むという授業スタイルをやめることの重要性を意味する。最後に、教師の取るべき役割は、「自分自身を『舞台に上がった賢人』に見立てるような伝統的なものではなく、むしろ、『側に付き添う案内人』というようなものになるはずである」というACTFL-OPIマニュアルにある言葉(1999:121)を付け加えておきたい。

【参考文献】

- ACTFL(1999), ACTFL Oral Proficiency Interview Tester Training Manual, 牧野成一監修(1999)『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』アルク
多田孝志(2011)『授業で育てる対話力—グローバル時代の『対話型授業』の創造』教育出版
多田孝志(2006)『対話力を育てる—「共創型対話」が拓く地球時代のコミュニケーション』教育出版
平田オリザ(2012)「日本語教育と国語教育をつなぐ『対話』」鎌田修・嶋田和子編著『対話とプロフィシエンシー—コミュニケーション能力の広がりともまりをめざして—』凡人社, pp. 28-44